

## 5-3 より効果的な運用に向けて

(3月28日更新)

これからの多摩市の発展に向けて、より効果的な運用について議論しています。

### 地域の持続性

「できてしまうことでも、あえてしない」という工夫が、「自分には無理かも」とならないしくみづくりの第一歩になるかもしれない点が、これまでの考察から少しずつ見えてきています。

### (財政・人材の) 独立性

我が国の財政から、地方財政についても、延々と親からの仕送りという図式は成立しなくなると言われています。いずれ迎え入れる状況に至るのであれば、その時になってはじめて検討するのではなく、常にスタンバイできていると言える状態であることが望ましいと考えられます。

「自分たちでできることは」という議論から始まり、地域で支え合うという方法論になっていくのですが、丁寧な過程

を経ることで、「多数参加型の地域運営が負担のばらつきを抑えていく」ことにつながります。そのためには、「地域」を「家族」の延長線として捉えることのできる雰囲気かどうかが必要（かなめ）となります。

例えば、様々な事情（育児、介護など）で地域への参画が困難だが地域によるサポートを必要としている人々の情報をどう把握できるかという課題提起ができますが、近所で皆が知り合いになることが最善策のようにも考えられます。

### 地域づくりを通じて

これまで多種多様に設置された公的施設・施設は、今後国レベルでは総人口、地域レベルでは地域人口の全般的な減少に伴い維持・運営に支障をきたすことが各地で議論されています。

再編を行う前に、相互補完することができるのであれば、それぞれの得意領域を活かして何をどのように融通しあうことが望ましい状態かを的確に把握する必要があります。その調整役に（仮称）地域委員会構想の役割があると考えられます。

地域運営における重要点は、これまでの考察からわかるとおり、一人ひとりの力の「可視化」であり、「協力が高まる

ほど個人レベルでの負担が分散化する」物理的な法則となります。そこで、協力が高まるほどリスク・不確実性が軽減され、生活の質 (Quality of life) や幸福度指数が大きくなる関係の解明が今後の研究課題の1つとなります。

無理なく継続可能な地域システムは、「自分から手を挙げることはないが、頼まれたら引き受ける」というアンケート回答結果からも、今後明るい兆しがあり、そのためのしくみが必要になります。「頼まれれば引き受ける」という心強いサポートを全面的に下支えできる運営は不可欠となり、それが(仮称)地域委員会構想の構成要素の一部をなす行政の役割と考えられます。

以上の点から、「必ずしも全員参加ではない」という体制を整えることもできる。「無理なく」には、「基本的に自然体でやりがいを感じ続けることができる。」という視点が含意されます。「1人が100を担う」のではなく、「10人が10を担う」という手段でも成果は同数が満たされ、かつ1人の負担も10数分の1に軽減されます。このしくみを次年度以降、モデルエリアを中心に作り上げていく方針です。

---

<sup>1</sup>『地域デビュー手引書』2019-20年度版 市民活動団体紹介編

## 今後の取組み

最後に、多摩市には『地域デビュー手引書』<sup>1</sup>があります。これは、地域の人たちがお稽古事や趣味で集まる場を1つのデータベースとしてとりまとめたものです。スポーツ、芸術、歴史、様々な学びの場が身近な場で市内全域にわたって繰り広げられています。自然環境と触れ合う場も潤沢な地域で、「多摩市で暮らせばいろいろなことが満喫できる」というシグナリング効果になることが期待されています。

さらに、生活基盤としての食材店などの立地に関すること、近くにお店がない場合のアクセス性またはエリア内での課題解決に結びつく方法の考案、女性が働きやすい柔軟な雇用形態の地域での創生や再スタートサポートとしてのリカレント教育との連携、といった高度な社会の形成に向けた取組みを、エリア単位ではじめていくことを私たちの今後の研究課題と位置づけています。